

陽春の きまじめ レタス

冬の寒さに耐えて
おいしさをじっくりたくわえた
春どりのレタスは、
バリバリ、シャキシャキの食べ応え。
茨城県の坂東市岩井で
レタスを育てる飯塚実さんを訪ねました。





関東平野が広がるこの地域では、古くから農業が盛んに行われてきた。

2倍の時間と 手間がかかる

2月下旬。寒い冬をじっと耐え抜いた春レタスが、ついに収穫の初日を迎えました。ふんわり結球したレタスの根元を包丁で切り、外葉を落とししたらコンテナの中へ。畝と畝の間は切り落とした外葉で埋まり、畑一帯がレタスの青々とした香りに包まれます。

茨城県西部に位置する岩井地区は、県内でも有数のレタス産地。レタスと長ねぎを生産している飯塚一実さん(67)の畑にお邪魔すると、妻の春美さん、息子の雅弘さんの3人で収穫作業の真っ最中でした。

ずっしりとしたレタスを手にし、「今年はいい出来ですね」と春美さんがにっこり。

この春レタスは昨年10月20日に種をまいて、12月20日に定植したものの、4ヶ月を経て収穫を迎えました。飯塚さんは、春レタスと秋レタスを年2回栽培しています。秋レタスは生長が早く、8月に種を巻いて10月には収穫が始まるので、栽培期間は2

ヶ月。春レタスの約半分の期間です。温度差の大きい季節に育てる春レタスは、時間だけでなく手間もかかります。

例えばその一つが換気作業です。春レタスは、寒さから守るため畝にビニールのトンネルがかけられています。このトンネル内の温度調節が、レタス栽培の要。換気をしないとトンネル内が高湿になり、葉の裏に白いカビがつく「べと病」が発生してしまうこともあるそうです。

毎朝夕の トンネル換気

トンネル内の空気を換気するには、ビニールをたくし上げたり下ろしたりする必要があります。換気棒と呼ばれる棒を手にした飯塚さん、畝の間を歩きながら、棒を器用に使うトンネルを開けていきます。1列終わったら隣の列、そして次の列。片側だけ開けるのか、両側を開けるのかなど、レタスの生長とその日の気温や天気を判断しながら調節します。「やってみる？」と飯塚さんが作業を代わらせてくれました。簡単に見えた作業ですが、意外と腕の力を使います。1列終わっただけでへとへとに。朝早くからこれを毎日繰り返すし、夕方には閉める作業もあるというのだから、その手間は並大抵のものではありません。

こうして手間をかけたレタスたちだからこそ、「秋レタスより春の方がおいしいよね」と飯塚さん。

春どり品種の中でも、「ビルボー」や「プロディ」など、時期をずらしながら複数の品種を育てていますが、この日収穫した「クールガイ」という品種は、「歯ざわりが柔らかく感じる」と飯塚さんもお気に入りです。レタス栽培は「品種が50%、肥料



まじめに
まっすぐに
レタスも
育ててる



- 1 飯塚さんのレタスは、柔らかさとシャキシャキ感が同居していて、葉からパワーがふれ出ているよう。
- 2 飯塚さんの手帳にはいつ種をまき、定植したのかなどがメモされていた。
- 3 朝早く、換気棒を手にした飯塚さんが、トンネルの窓を開けていく。
- 4 収穫が終わった後の畑に、緑肥としてライ麦を植えている。



が50%」と考えている飯塚さん。栽培が終わった後は、ライ麦、エンバクなどを栽培して緑肥としてすき込んで地方を回復させたり、プラソイラーで土を掘り起こして水はけを改善したり、土作りに余念がありません。

慣行栽培では土に殺虫剤を混ぜて防虫する場合がありますが、「レタスが吸い込む可能性もあると思うんだよね」と考える飯塚さんは、行っていないません。

有機質肥料での土作りや農薬を極力使わない考え方は、お父さんの代から続いているものです。

代々農家の飯塚家は、現在4代目。初代から2代目は、米や麦を中心に作っていましたが、お父さんの代からレタスを作り始めました。大地を守る会との取引も、もう30年以上。

同じく茨城県内でメロンを生産している義理の兄が先に取引していたのを知り、飯塚さんから大地を守る会に電話をかけたのがきっかけなのだそうです。

レタス名人・飯塚さんのレタスは、一度食べれば誰もが認めるおいしさ。会員さんの中には長年のファンも多く、会員さんの声で選ばれる「農家・オブザイヤー」にノミネートされたこともあります。

レタスというと、野菜の中ではそこまで目立つ存在ではないかもしれませんが、サラダの中になんとなく入っている脇役のようなイメージがありますが、飯塚さんのレタスは違います。柔らかさと力強さが同居していて、食卓で主役を張れる存在感。ノミネート時も、「葉の厚さ、柔らかさ、シャキシャキ感が絶妙で、今



収穫作業に精を出す息子の雅弘さんと妻の春美さん。

息子が受け継ぐレタスへの愛情

まで食べたレタスの中で一番おいしい」などの声が集まりました。

はなにより、几帳面できっちりしたお人柄。頻繁に草取りがされていることがわかるきれいな畑や丁寧な作業に、人柄が表れているようです。「ここはいつ種を巻いたんですか?」などと質問すると、すぐにポケットから手帳を出して、正確に答えてくださいます。手帳には、どの品種をいつどれだけ植えたのか、記入して

あるのです。さて、収穫したレタスは、トラックに乗せて作業場まで運ばれます。このあとはラッピングと出荷の作業です。こちらも3人で手分けして行います。

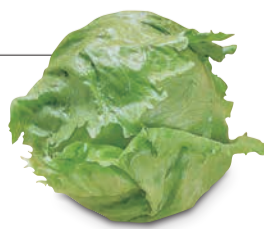
まずは春美さんが包丁で6〜7枚外葉を落とします。それを受け取るのは霧吹きとタオルを手にした雅弘さん。レタスについてしまった土や砂ぼこりを、水を吹きかけて拭き取っているのです。現在36歳の雅弘さんは、3歳の頃には包丁を持って外葉を切り落とす手伝いを始め、高校生の時点で農家を継ぐことを決めていたそうです。

柔らかいレタスに傷がつかないようになら、3歳の頃から、レタスへの優しい手つきからは、レタスへの愛情と、几帳面さがうかがえます。

レタス名人の真面目でまっすぐなレタス作り。次の代にもしっかりと受け継がれていくからこそ、これからも食べ続けることができる。私たち消費者にとって何よりの安心と喜びではありませんか。



5 収穫されたレタス第1号がトラックに乗せられ運ばれていく。
6 出荷作業も家族3人で。一つずつ丁寧にラッピングし箱詰めされる。



パリッとした食感、濃いうまみで存在感抜群
春のレタス

1062 産
1コ 368円(税込397円)
※異なる産地のものが届く場合があります。

ソーシャルレポート

2月25日(土)に4年ぶりにリアル開催した、「大地を守る会オーガニックフェスタ2023」についてレポートします。

編集後記

農業に頼らずに育てた野菜とはどういうものなのか。その答えはさまざまあり、そのうちの1つは味についてです。飯塚さんのレタスは、バリツとした食感と濃いうまみに驚かされます。土地や栽培方法などどのように育てられたのかは、味に出るのです。(編集部・大塚)

笑顔があふれた「大地を守る会オーガニックフェスタ2023」

有楽町で4年ぶりにリアル開催しました

「大地を守る会オーガニックフェスタ2023」は、穏やかな陽気の2月25日(土)に東京交通会館(有楽町)で開催されました。1978年から毎年開催し続けてきた、大地を守る会の生産者が全国各地から集まる「大地を守る会オーガニックフェスタ」。新型コロナウイルス感染症の状況により、2020年の中止、

2021・2022年のオンライン開催を経て、4年ぶりのリアル開催でした。会場のあちこちで笑顔がいっぱいだったのがとても印象的でした。約2,000名の方にご来場いただきました。ご来場いただきました皆さん、参加していただきました生産者の皆さん、誠にありがとうございました。



再会と新たな出会いのマルシェ

今回のテーマは「大地を守るマルシェ」。55の生産者が出店し、来場した皆さんは生産者とおしゃべりをしながらお買い物を楽しみました。「久しぶりに生産者に会えて嬉しかった」、「初めて生産者に会ってお話して楽しかった」、「新しい商品に出会えてよかった」と来場した皆さん。生産者たちも、「会

えると嬉しいよね」、「やっぱり直接会わなくっちゃね!」と言っていました。便利な世の中になり、便利さが役に立つことももちろんありますが、ぬくもりと信頼が感じられるこの「つながり」は、「顔のみえる関係」があるから生まれるのだと感じました。また、お会いしましょう!



- 1 試食もあり、新しい商品との出会いもたくさん。
- 2 オーガニックフェスタ特別バージョンの「オイラの弁当」も完売。
- 3 直接会えると、やはりみんな笑顔になります。
- 4 「生産者トークライブ」でも楽しくお話を聞きました。

皆さんからの声で生産者を表彰するアワード「農家・オブザイヤー2022-2023」の受賞者が決まりました!

会員の皆さんからの「おいしい」や「応援したい」などの声を多く獲得した生産者を表彰する「農家・オブザイヤー」。2010年から加わった「メーカー・オブザイヤー」なども同時に開催され、2022-2023年の受賞者が決まりました。大地を守る会部門で最も多くの声を獲得した原明子さんは、大地を守る会部門・らでいっしゅぼーや部門・Oisix部門の全体においても最も獲得数が多く、「最高金賞」にもなりました。食べる人の声は、作る人にとって大きな力になります。ぜひこれからも生産者へメッセージをお送りください。



大地を守る会部門

- 【金賞】りんご/原明子さん(長野県松本市)
- 桃/一宮大地(山梨県笛吹市)
- 長ねぎ/岡村グループ(埼玉県熊谷市)
- トマト/福島わかば会(福島県)
- 小松菜/ふしちゃんファーム(茨城県つくば市)

▼詳しくはこちら



エコシュリンプの洪水被害の支援報告

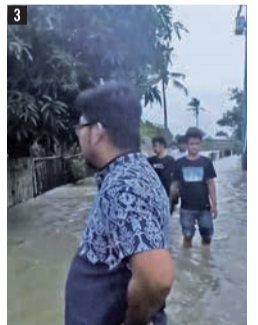
2022年12月23日、強風と高潮を伴う豪雨がインドネシア・スラウェシ島南部を襲い、「エコシュリンプ」の生産者たちを含む多くの人々が被害を受けました。洪水の被害を受けた生産者は合計399名、養殖池は457箇所、総面積は914.34ヘクタールにのぼります。政府による支援の目途が立たない中、生産者や仲買人などが費用を出しながら砂の除去作業を始めています。大地を守る会はオルター・トレード・ジャパン(東京都新宿区)を通して、DAFDAP基金から緊急支援34万円を送金しました。現地の状況や支援の報告などの詳細は改めてお知らせいたします。



1 強風と高潮で、防波堤にぶつかり大きくなってしぶきを上げる波。



2 スラウェシ島にあるエコシュリンプの現地会社の事務所も浸水。



3 住宅地域もまるで川のように。

『NEWS大地を守る』はWEBでもご覧いただけます。イベントの詳細・お申し込みもWEBからどうぞ。

大地を守る会

検索



●『NEWS大地を守る』に掲載している取り組みは、主に大地を守る会の宅配サービスの年会費・利用料で運営されています。

お問い合わせ

オイシックス・ラ・大地 ソーシャルコミュニケーション部
TEL●050-5306-8513
E-mail●ord_social@oisixradaichi.co.jp

注意事項

当社は、大地を守る会のイベント及び大地を守る会が告知する他団体のイベントにお申込みいただく際、ご記入いただく個人情報を、お申込み内容に関する確認、参加者への連絡、抽選、抽選結果連絡、お問合せに対する回答、非常時に関する対応、イベントの質向上管理のために利用させていただきます。なお当社は、イベント等を旅行者に業務委託する場合があります。この場合、個

人情報を開示することがあります。業務委託にあたっては、個人情報の保護に関する契約を締結し、業務委託先が契約を遵守するよう必要かつ適切な管理及び監督を行います。上記に同意の上お申込みください。個人情報の取扱いに関するその他の条件については、当社ウェブサイトの個人情報保護方針をご確認ください。
<https://takuai.daichi-m.co.jp/Information/8>

※イベントについてWEBへのアクセスが不可能な場合は、ソーシャルコミュニケーション部へお電話いただき確認・お申込みください。



大地を守る会
DAICHI-wo-MAMORU KAI

発行 オイシックス・ラ・大地株式会社
東京都品川区大崎1-11-2 ゲートシティ大崎イーストタワー5階
TEL 050-5306-8513